

節目の年

浅井 俊弥

2023年も残すところあとわずかになった。ウクライナに続きガザで戦闘が勃発するなど、いまの時代にこのようなことがおき、誰もそれを止めることができないとは、想像もつかなかった。一方で、新型コロナウイルス感染症によって抑圧されていた交流の場が徐々に復活し、4年ぶりに開催される懇親の会が増えてきた。

先日、日本臨床分科医会代表者会議が開催され、日本臨床皮膚科医会(日臨皮)の一員として出席した。この会は各科学会とは別の、臨床医会の集まりで、各医会の活動内容、注力していること、抱えている課題、他科へのお願いなどの意見交換をする会合である。日本医師会からも担当常任理事の出席を仰ぎ、医師会への陳情も行っている。日臨皮からの報告、提案は以下の通りである。①一般社団法人への移行、②皮膚科医の在宅医療連携に関する普及促進についての要望、③製薬企業が不採算と考えた外用薬が製造販売中止になっていく現状、④高額なアトピー性皮膚炎治療薬が学童、さらに乳幼児に適用拡大されることと、小児医療費無料化との兼ね合い、⑤地域における医師会活動への参画啓発の課題。どれも、日臨皮が日本皮膚科学会とは少し異なる視点で取り組んでいることを報告した。懇親の会では他科の多くの先生と交流でき、有意義な会合になった。

個人的な話題で恐縮だが、高校の同期会が4年ぶりに開催された。65歳という節目の年で、医師以外の同級生の多くは“第二の人生”という言葉の口にし、山登りやゴルフなどの趣味に没頭していた。大学や病院勤務の医師は、医師としての第二の人生を模索していた。開業医は自分を含め第一の人生の延長線上にあり、苦労とやりがいと一緒に続いている生活が続いていた。

一昨日、自宅に自身の介護保険証が送られてきた。少し前には肺炎球菌ワクチンの接種券も届いた。そろそろ第二の人生に一步踏み出す勇気が必要かもしれない。年末年始は4年ぶりの忘年会、新年会も多く計画されている。楽しくもあり、苦しくもあり。そんなことを考える年の瀬である。